子育て中の生涯学習における活動の実際とリーダーの意識に関する研究
―文化活動サークルのリーダーを務める母親たちへのインタビューから―

山本　双葉

A Study on the Actual Conditions of Activities and Leaders' Attitudes in Lifelong Learning while Raising Children
―Interviews with mothers who are leaders of cultural activity circles―

Futaba YAMAMOTO

要旨

本研究では子育て中の生涯学習について、文化活動サークルのリーダーを務める母親を対象にインタビュー調査を行い、活動の実際とリーダーの意識を明らかにした。その結果、7 つのカテゴリーと 40 の下位カテゴリーが抽出・分類された。対象者は、出産前の経験を活かし、活動仲間との関係を築きながら、自身の学びとなる活動を継続していることが明らかになった。子ども連れでの活動は、さまざまな工夫と配慮を伴いながら、メンバーや子どもの成長とともに変化し、家族とも相互に影響し合っていることが示された。日々成長し変化する子どもの存在が親自身の変化（の欲求）を促していたケースから、親であること自体が活動の開始や継続を強化するという可能性も示唆された。リーダーは活動と生活とを調整しながら継続の工夫を行ない、活動を自己の成長とともに仲間や観客への貢献としても位置づけている。

キーワード：生涯学習、子育て、母親

Ⅰ．はじめに

現代の子育て家庭を取り巻く環境については「核家族化」「都市化」「孤立化」といわれるように、人間関係の希薄さやコミュニケーション力の低下などが課題として指摘されている。2015 年に行われた全国の母親 2400 人を対象とした調査では、母親自身が育った市区町村以外で子育てしている割合が全体の 72.1％にのぼることが明らかになっており、この状況は「アウェイ育児」と呼ばれている[1) 2)]。親たちは、自身の子ども以外の子どもに触れる機会も少なく、子育てにより孤立したり、子育てへの不安や負担を感じたりしている[3)]。そのなかにあって、同じ「親」という立場同士で集い、学びの楽しみを主目的としながら、子ども連れで活動するサークルが存在する。たとえば「ママ（さん）○○」というようなサークルで、○○にはバレーボールなどのスポーツ名や、ブラスバンド、ダンスなどの文化活動名が入っていたりする。いわば、親自身が、親役割以外の「自分自身」になり、学びを楽しんでいる生涯学習の場である。本研究はそのような子育て中の生涯学習について、場を開き続けるリーダーへのインタビューから、子ども連れでの活動の実際と、リーダーの意識について明らかにするものである。

ここでは研究の背景として 1 節で現代社会の

子育て環境とサークル活動について、2節で生涯学習と現代社会の子育てとのかかわりについて論じる。

1. 現代社会の子育て環境とサークル活動

前述したような現代社会における「子育ての孤立」についてはすでに1980年ごろから指摘されている[4]。このような状況を打破しようと、子育て中の母親たちが自ら子育てサークルという自主的な親子の交流の場を立ち上げ始め、1980年代後半から2000年代初めにかけて日本全国各地で最盛期を迎えていたとされる[5]。

原田（2006）はこの自主的な子育てサークルに「現代日本の閉塞した子育て状況を打開する“希望の灯”のようなものを感じ」たと述べ、グループ子育てへの継続的な支援活動や調査を行なった[6]。原田は支援活動と調査を続ける中で子育てサークルが徐々に変化しているとして次のように考察している。1995年度から開始された「エンゼルプラン」により、公的機関が「子育てサークル」をつくる取り組みを展開していくと、親たちは受け身になっていき、「自主的なグループ子育ての機運は潮が引くように消退してしまった[7]。」よって、公的な支援のあり方として当事者の主体性をいかに伸ばすかという点を強調している。

藤本（2020）は子育てサークルOB対象の調査から、子育てサークルに参加して長年活動をすることで、個人的なエンパワメントだけでなく、そこから集団や地域のソーシャル・キャピタルを豊かにすることを検証している[8]。しかし、2002年からの国庫補助事業「つどいの広場事業」や、2008年の児童福祉法等の一部改正により第二社会福祉事業として位置づけられた地域子育て支援拠点事業の進展により、自主的な子育てサークルを継続する意味が失われ、徐々に衰退している傾向にあるという[9]。

以上、子育て中のサークル活動の意義と現在までの流れについて概観した。本研究が対象にする、親による生涯学習の活動サークルとは「子ども連れで集まり、ともに活動を楽しむ」という形態の面で類似している。自分たちのニーズ達成のため親自身が立ち上げを行い、活動していくという点でも、同じような成り立ち方が推測される。ただし、集う目的が「ダンス」「ブラスバンド」など明確なサークルは、現時点での地域子育て支援拠点事業では補えない部分があるので、公的サービスに取って代わられる可能性が少ないといえる。また、「（親であっても）〇〇を楽しみたい、学びたい」という目的が明確なため、自身の子どもが就園・就学で手が離れても、場に参加し続ける動機が失われない。自身の生涯学習として継続し続ける意義があるのだと考えられる。

次に、親自身の生涯学習の意義を考えるため、生涯学習と現代社会の子育てに焦点をあて、論をすすめる。

2. 生涯学習と現代社会の子育てとのかかわり

1965年にユネスコで生涯学習の考え方が提案されてからおよそ60年が経った[1]。学びの機会は、すべての人に対して、人生のあらゆる段階（時系列に沿った垂直的次元）において、あらゆる場（個人および社会の生活全体にわたる水平的次元）で保障される必要があるという「生涯学習」の考え方は、今や私たちの生活の基盤となっている。

生涯学習における学びの考え方については二つの異なる系譜があり、学びを「存在の領域」として理解するか「所有の領域」として理解するかという点で整理される。

「存在の領域」について田中（2020）はラングランの次の言葉を引き、「より多くの知識を手に入れ時代にキャッチアップすることではなく、自己実現をこそ目的と」する理念であると述べている[10]。

“（これから必要になるのは）博識を獲得することではなく、自分の生活の種々異なった経験を通じてつねによりいっそう自分自身になると

いう意味で存在の発展である。”（ポール・ラングラン（1990）『生涯教育入門』全日本社会教育連合会）

このように「学びに意味があるのは、それが何かに役立つからではなく、それ自体に価値があるからだ」という考え方は、「存在の領域」（＝“Learning to be”）として示されている。

一方で「所有の領域」（＝“Learning to have”）にある学びとはOECDにおける生涯学習の理念であり、上述の「存在の領域」とは対照的に、役立つことを重視した学びの考え方である。1996年にOECD教育大臣会議は、生涯学習が「個人の生活を豊かにし、経済成長を促進し、社会的結束を維持する」ゆえに各国政府はその基盤整備に努める必要があるとして「万人のための生涯学習」という文書を発表している。現在も「知識基盤型社会」の確立をめざすOECDの教育政策を規定するフレームワークとして「万人のための生涯学習」という考えが用いられているという[11]。

子育て中の生涯学習に視点を絞ると、地域の中で子育て中の女性が集い学びあう機会は、戦後、公民館事業「婦人学級」として全国に波及した[12]。その後も保育つきの公民館講座の開講などを通して社会教育のフィールドで牽引されてきた。

たとえば、柴田（2020）は公民館講座を受講する過程で子育て中の女性が地域づくり活動を実践していくための「主体性」が形成されていくプロセスを分析している[13]。この例では、「主体性」獲得のための基盤整備が公民館企画実行委員や職員によりなされたところを第1段階として、講座の受講や仲間との語らいを深めて、社会をつくるための実践力獲得に至っている。また、中村（足利）（2023）は三鷹市の「子どもと絵本プロジェクト」施策にかかわる事業として展開されたボランティア育成講座の受講者である母親たちの学び合いの効果を、実践コミュニティとソーシャル・キャピタルの視点から考察している[14]。また、山澤（2023）は公民館主催の保育つき講座を修了した母たちによる「気づき」の内容分析と類型化を行い、「他者認識型」の気づきにより、事業目的である「地域における仲間づくりと活動」が達成されたことと、講座の内容から「共感型」「他者感謝型」「社会感謝型」の3種類の類型が特徴であったことを示している[15]。これらの先行研究から、子育て中の生涯学習が、母である女性たちへのエンパワメントとして機能していることがわかる。

これまで社会教育のリードで発展してきた子育て中の生涯学習研究であるが、公民館や大学等の助けのない自主的なサークル活動の実際はどのようなものであろうか。リーダー自身も子育てをしている中で、活動の場を開き続けることに難しさや葛藤はないのだろうか。

そこで、本研究ではこうした子育て中の生涯学習について、文化活動サークルのリーダーを務める母親たちにインタビュー調査を行い、子ども連れでの活動の実際と、リーダーの意識について明らかにし、考察していく。

Ⅱ．方法

1．対象者

本研究では、リーダー自身も子育てをしながら生涯学習の場を開き続けることの実際を聞き取るため、対象者を「親」であり、サークルのリーダーであることと設定した。また、対象の活動団体としては、子どもと参加可能でありながらも特定の学びを目的としたサークルであり、かつ、主体的な活動の実際を調査する観点から行政や大学の主催ではないサークルと設定した。

対象者は上述の設定に一致する次のサークルのリーダーである。①ママダンスサークル②多言語サークル③赤ちゃんから大人まで楽しめるコンサート開催サークル④ママさんブラスバンドの4サークルであり、このうち④は4人でリーダーとしての運営業務を行い、1～2年で代表を変える仕組みである。今回のインタ

ビュー対象者は全て女性であったが、サークルの構成メンバーは①④が母親のみ、②③は母親と父親が混在している。対象者をTable 1に、対象サークルの概要をTable 2に示した。

2. 調査期間

2023年9月から11月に1組2～3時間の半構造化インタビューを行なった。Cさんのみオンラインインタビューの形で行い、それ以外は対面式で行なった。D～Gさんの4名は、④ママさんブラスバンドのリーダーとして4名で運営業務を行なっているため、4名と筆者とのグループインタビューとした。

3. 手続き

はじめに調査の目的と概要の説明を行なった。インタビュー対象者は説明に基づき、自身の活動概要を調査用紙に記入した。調査用紙の項目は以下の8項目から成る。「名前」「生年月」「活動内容」「活動頻度」「活動時間」「現在の活動をいつ頃から始めたか」「ご自身のお子さんの人数」「お子さんの年齢、生年月」

次に、対象者が活動の全体像を振り返るために山本（2011）の「音楽の生涯学習における活

Table 1　対象者の概要

活動団体	対象	年齢	子どもの年齢	活動年数
① ママダンスサークル	A	40代	12歳	11年
② 多言語活動サークル	B	50代	28・25歳	23年
③ 赤ちゃんから大人まで楽しめるコンサート開催サークル	C	30代	7・2歳	5年
④ ママさんブラスバンド	D	50代	24・21・17歳	15年
	E	50代	18歳	16年
	F	50代	18歳	13年
	G	40代	23・19・14歳	16年

Table 2　対象サークルの概要

活動団体	人数	活動頻度	活動時間	活動場所	指導者	会費
① ママダンスサークル	14名	週1回	1～2時間	公民館	自身	レッスン1回500円 年会費3000円
② 多言語活動サークル	25名	地元の活動：週1回 地域や全国を考える会議：月3～4回	各1～2時間	マンションの集会所	なし	1世帯 約10000～20000円／月（家族の人数等による）
③ 赤ちゃんから大人まで楽しめるコンサート開催サークル	5名	コンサート開催：1～2年に1回（約半年前から準備を始める） 合同練習活動：本番1～2か月前から約2週に1回	5～6時間	メンバーの自宅	なし	コンサート1回約15000円（かかった経費を都度割る）
④ ママさんブラスバンド	42名	週1回	2～3時間	公民館や学習センター	指揮者	1000円／月 年会費6000円

動プロセス理論」のモデル図（Figure 1）を活用した[16]。この活動プロセスについて、山本はM-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）によって生成した本理論のモデル図が、学習者が自身の学習活動を俯瞰する際のマップ代わりとなりうること、方法論的限定の枠を広げた場合の、音楽だけではない他の文化への援用可能性についても示している。生涯学習の活動プロセスは人生の至る出来事がかかわってきているため、このような網羅的なモデルは対象者自身の活動について自明な点を意識化したり、整理を助けたりする働きがあると考えられる。

したがって、インタビュー開始前に本理論のモデル図をインタビュー対象者に渡し、対象者自身の活動プロセスを振り返りながら自由に書き込んでもらう時間をとった。

インタビュー内容は録音の同意を得て後日すべての会話の逐語記録を作成した。逐語記録を読み込みながら「リーダー自身が子育て中にあって生涯学習の場を開き続けることの実際」という点に着目してカテゴリーを抽出・分類した。

4. 倫理的配慮

インタビュー調査においては、対象者に研究の目的と内容について十分に説明して理解を求め、了承を得た。また、対象となる個人が特定されないよう、匿名性に留意し記載した。

Ⅲ. 結果と考察

子育て中の生涯学習について、文化活動サークルの実際とリーダーの意識を明らかにするために逐語記録を分析した。その結果、Table 3に示す通り7つのカテゴリーと40の下位カテゴリーが抽出・分類された。

Table 3の表記に関して、エピソード例として具体的な内容をまとめ、実際の対象者が発した言葉を抜き出す場合は「」に入れて表記した。下位カテゴリーの内容がインタビュー中の語りに該当していたサークルを「該当」蘭に「①②③④」という形で表記した。

以下の結果についての表記はカテゴリーを【】で表し、下位カテゴリーを〈〉と表記する。

Figure 1　音楽の生涯学習における活動プロセス

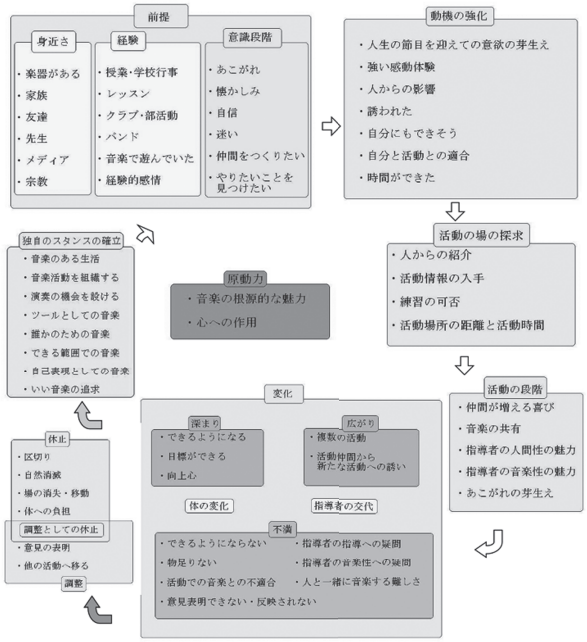

Table 3　活動の実際とリーダーの意識

カテゴリー	下位カテゴリー	エピソード例	該当
前提	出産以前の経験を資源に活動を行なっている	・部活動や学校での経験がある ・出産前までに習ったり教えた経験がある	①②③④
	モデルとなる他のサークルの存在	・発足の際、他の市で既に行われていたママさんブラスサークルからノウハウを教えてもらう ・発足前に別のママサークルやグループに所属していた	①②④
活動開始の動機	子どもがいても活動ができそうな実感	・他サークルの参加で子ども連れでも楽しむ経験をする ・見学に行った際に、おんぶをしながらドラムを叩く別の母親を見て「私もできそう」と感じる	①②③④
	一緒にサークル発足を進められる仲間の存在	・お互いの子どもが近い年齢で、活動開始のために一緒に動ける仲間の存在	①③
	自分を変えるチャレンジ	・他グループのメンバーだったが「毎日を精一杯生きることで自分を変えたい」と考え自分のグループを作る	②
	子どもの成長により手が空き始めた	・「子どもが２歳くらいになって少し手がかからないというか、あき始めた」	③
活動の実際	子どもと一緒に参加できる	・赤ちゃんや小さい子どもがたくさんいて一緒に活動する ・マットなどを敷いて、子どもがいやすい環境を作る ・子どもがいながらも大人が楽しんで活動している	①②③④
	子どもを抱っこやおんぶした状態で活動	・子どもを抱っこやおんぶしながら演奏やダンス、ゲームなどをする	①②④
	子どもがぐずっても平気な環境	・多少ぐずっていてもお互い様で平気な雰囲気	①④
	子どものための工夫	・おもちゃや、おやつなどを各自準備している ・赤ちゃんは抱っこひもやおんぶひも等でゆらゆら揺らしながら活動し、寝かせる	①④
	子ども達を見守る役割の存在	・時間を決め、子どもの見守り係を分担した ・練習会場になっている家の父親が子どもたちをまとめて面倒見る	③④
	子ども同士が遊ぶので手が離れる	・子ども同士が遊ぶことで親の手が離れる	①②④
	小さなトラブル	・子ども同士がけんかをして親同士も仲裁に入らざるを得なくなる ・見守りが他人の親だと言うことを聞かない	①④
	子どもの就園・就学・預かりで単身で参加できる	・子どもが就園や就学することで単身で参加できる ・子どもを家族に預けて単身で参加できる	①④
	いざという時に夫や実母に子どもを預けられる安心感	・子どもの発熱などがある場合でも、いつでも夫や実母が協力体制を整えてくれているという安心感	①②
	活動自体の魅力	・音楽に合わせて体を動かすのが楽しい ・衣装を着て、メイクをして舞台に立って踊る「ダンスの醍醐味」を感じる ・聞いたことがあるだけで意味がわからなかった外国の言葉が、状況と重なって聞こえたことで意味がわかる喜び ・人前で演奏するのが好き ・楽器の音を鳴らした瞬間の感動	①②③④
	オンラインプラットフォームの存在	・SNS（LINE,mixi）やブログ等で意見交換や活動報告ができるので、活動時間以外でも交流や相談が進む ・SNS（mixi）の存在が、サークルを見つけて入るきっかけになった	①②③④
	役割分担は得意な人が得意な分野を担当する	・事務作業やプログラム作り等、個々の得意分野を活かした役割分担がスムーズに決まる	③④

活動の変化	サークルの変化とともに取り組みも変化する	・「サークルの成長とともに演奏する曲も変わってきた」 ・「みんなも自分も痛いところが出てきたりするから、そのケアの仕方も含めて新しいことを取り入れる」	①④
	子どもの成長とともに取り組みも変化する	・「自分の子が1,2歳の時は親子ダンスとして、3歳からはママダンスとキッズダンスに分けることにした」 ・「今までは赤ちゃん向けだった選曲を小学生も楽しめる曲だったらというのも考え始めている」	①③④
	経験の蓄積から要領を得る	・経験を重ねることによって、予測や対策ができる	①③④
	生活に合わせて活動を調整する	・生活の中で都合がつく日時を活動日として設定する ・子どもの就学等で変わる生活時間に合わせて、活動時間をメンバーの意向も聞きながら変更・調整する	①③
	活動に合わせて生活を調整する	・サークルの活動日時が決まっており、その時間を確保できるような仕事を探す ・活動の計画を立て、活動に支障が少ない日時で旅行などプライベートな予定を入れる	②④
	負担感	・活動に関係することで忙しく、体や心への負担感を感じることがある	②③④
活動の仲間	実際の活動以外での楽しみを共有する	・活動メンバーとBBQをしたり、ご飯を食べたりして楽しみを共有する ・コロナ禍で活動ができなかった時に少人数で動画を撮影してメンバー向けに共有して楽しんだ	①②③④
	同じ「親」という立場で、同じものが好きな仲間	・同じ「親」であり、同じものが好きな仲間と、活動の楽しさや子の育ちを分かち合える喜び	①④
	仲間を家族のように思う	・「家族みたいな仲間」 ・「共に生きてく場、仲間だと思ってたから。本当に家族みたいに思ってた」	②④
	アクションを率先して起こす存在	・新たに活動を始めようと提案したり行動したりする人の存在	③④
	活動のスタンスの違いを感じる	・「リーダーとの熱量ってやっぱり違う」 ・「負担感のない範囲で続けたいと考える人と、やるならしっかりやっていいものにしたいと考える人で、意見が分かれている」	②③
家族からの影響・家族への影響	家族が理解・協力してくれている	・夫や子どもたちが、活動に対して理解・協力してくれる	①②③④
	子どもたちと本番で共演	・本番の舞台で母たちの演奏に合わせて子どもたちが歌ったり踊ったりする ・本番の舞台で親子一緒にダンスを踊る	①④
	子育てが活動に活きていると感じる	・子どもを育てている経験自体が、活動に活きている	①②③④
	活動が子育てに活きていると感じる	・活動をしていることで、子育てに良い影響があったと感じている	①②④
	活動させてくれてありがとうと思う	・うまく活動できた時に、まだ赤ちゃんだった子どもに対して「ダンスさせてくれてありがとう」と思った	①
	家族の負担	・「仕事ではないのに、家族の時間をこんなに奪っていいのか」という葛藤を感じることがある	③
活動の位置づけ意義	貢献心	・自分自身が活動を通してリフレッシュできたように、今度はその機会を提供したい ・演奏を聴いてくれた人が少しでも喜んでくれることが嬉しい	①②③④
	生活の一部	・活動が生活の一部になっている	①②④
	この仲間と一緒にいたい	・活動でできた仲間とこれからも時間をともにしたい	①②④
	日常であり非日常	・活動は生活の一部で日常であるけれども、楽しみでありワクワクを感じる「非日常」でもある	①②
	自分の成長	・自分の成長を実感できる喜び	②③

活動の実際とリーダーの意識についての抽出された7つのカテゴリーは【前提】【活動開始の動機】【活動の実際】【活動の変化】【活動の仲間】【家族からの影響・家族への影響】【活動の位置づけ･意義】である。以下、各カテゴリーについて詳述しながら考察をしていく。

まず、活動開始前の【前提】として〈出産以前の経験を資源に活動を行なっている〉〈モデルとなる他のサークルの存在〉があることが明らかとなった。他のサークルに関しては、自身に所属経験がある場合と、サークル発足に際して既に子ども連れで活動しているサークルを見学し、ノウハウを教えてもらっている場合があった。【活動開始の動機】として本調査の全てのケースに該当していたのが〈子どもがいても活動ができそうな実感〉である。実際におんぶをしながらドラムを叩く様子などを見たり、他サークルでの経験を活かしたりしながら、自身が子ども連れで活動できるイメージが形成され、活動開始の後押しをしていると考えられる。〈一緒にサークル発足を進められる仲間の存在〉が、相談をしながらサークル発足のきっかけになっているケースもあった。〈自分を変えるチャレンジ〉として他グループから自分がリーダーのグループを作ることを決めたり、〈子どもの成長により手が空き始めた〉と感じていることが影響している場合もある。この際の「手が空き始めた」と感じた子どもの成長とは、1歳や2歳のことを指していた。そこで対象者全員の活動開始時期を見ると、活動開始当時の末子の年齢は1歳が1名、2歳が3名、3歳が2名、5歳が1名であった。子どもが歩き始め、言葉でのコミュニケーションがスムーズになっていくことで、一緒に出かけて活動するハードルが下がるのかもしれない。

【活動の実際】では子ども連れで活動するサークルの特徴としてさまざまな実態や工夫が見られた。〈子どもと一緒に参加できる〉ことが何より大きな特徴である。たとえば以下の語りにも見られるように、当時は子ども連れで行ける大人の活動の場はなかなか存在しなかった。「子どもが3人いて、子育てだけだったんです、その時。まさに。で、もう本当、若い時バンドやってたけどバンドもやめて、子ども生まれたから。何も音楽やってない状態で。唯一こう音楽ができるっていうのに誘われて。子どもを連れていっても音楽できるってのは、こう、一点の光のように見えて。 それで行ったんだと思います。「子育てだけの人生なんて」みたいな感じ。もうあんまりね、あの、記憶がないんですよ。大変すぎて。3人小っちゃかった頃とか。やっぱり子ども連れて行って演奏できるっていうのは、すごい良かったです。」このような思いを抱える親たちが集まり、多くの乳児や子どもがおり、マットを敷いたり〈子どもを抱っこやおんぶした状態で活動〉したりしている。〈子どもがぐずっても平気な環境〉として、お互い様で安心な雰囲気があるという。おやつやおもちゃを用意する、おんぶした子どもを揺らしてあやしたり寝かしつけながら活動するなどの〈子どものための工夫〉が団体としても個人としても行われている。小さい子どもたちが多い場合は〈子どもたちを見守る役割の存在〉として時間を決めて係分担を行なったり、サークルメンバーの配偶者が活躍することもある。集まった子どもが仲良くなると〈子ども同士が遊ぶので手が離れる〉という現象も起き、子どものコミュニティができている場合もある。それでもけんかが起きる、親以外の大人の言うことを聞かないなど〈小さなトラブル〉はつきものである。〈子どもの就園・就学・預かりで単身で参加できる〉ようになると、子どもの人数が減ってきたり、それに寂しさを覚える、久しぶりに子どもが来ると嬉しいというケースもあった。リーダーとして〈いざという時に夫や実母に預けられる安心感〉があるからこそ続けられたという声もある。子どもが発熱やケガをするなど、活動に連れて行けない場合も想定するからである。

そして〈活動自体の魅力〉を語っているリー

ダーたちは嬉しそうであった。「吹奏楽の真面目な音楽は嫌い、捨てたと思っていたのに、楽器の音を久しぶりに鳴らした瞬間に一気に楽しかったことが思い出されて」「聞いたことがあるだけで意味のわからなかった外国の言葉（音）が、状況とセットになることで意味のわかる言葉になる」など、活動自体を楽しむ様子が生き生きと語られた。

また、実務的な内容としてはSNS（LINE、mixi）やブログ等の〈オンラインプラットフォームの存在〉のおかげで、活動以外でもさまざまな相談、交流等が進められるため全てのサークルが活用していた。〈役割分担は得意な人が得意な分野を担当する〉ことで、個々のメンバーの強みが活かされている。

【活動の変化】では〈サークルの変化とともに取り組みも変化する〉〈子どもの成長とともに取り組みも変化する〉という変化の様子が明らかになった。活動年数が重なれば、子どもたちもサークル自体もメンバーも成長する。そこで取り組む楽曲が変わったり、新たな取り組みが試行されたりしていた。また、メンバーが歳を重ねることでの身体的な変化や痛みへの対応も語られた。〈経験の蓄積から要領を得る〉ことで、活動への見通しがもてるようになる、楽にできる方法がわかるようになるという声もあった。〈生活に合わせて活動を調整する〉ことは、ある程度柔軟に活動時間や場所を設定できる様子であるが、該当していたのが①③で5名と14名の小中規模のサークルであった。逆に25名、42名ほどの人数である②④では活動時間は明確になっており、各自その時間を避けて仕事をしたり、プライベートの予定を入れていた。つまり〈活動に合わせて生活を調整する〉ことで継続を可能にしていたのである。どちらの場合でも調整しながら活動を継続していくことに〈負担感〉を覚える場合があり、②のケースでは負担の大きさが活動の休止につながっていた。

【活動の仲間】とは、共にご飯を食べたり、BBQをするなどして〈実際の活動以外での楽しみを共有する〉ことも多い。コロナ禍で活動ができない中で、クイズや近況などの動画撮影をともに行なった例もある。そうして活動以外でも仲間に会う喜びが、さらにメンバー相互の絆を深める一因になっている様子である。〈同じ「親」という立場で、同じものが好きな仲間〉とは、活動の楽しみも互いの子の育ちも喜び合え、ともにする時間を重ね、絆も深まると〈仲間を家族のように思う〉ケースもあった。メンバーの中に（もしくはリーダー自身が）〈アクションを率先して起こす存在〉がいることで、活動が停滞しそうになっても、新たな取り組みが始まることがある。しかしながら、メンバー同士やリーダーとメンバーの間などに〈活動のスタンスの違いを感じる〉こともあり、どこまでの時間やコストを費やすか意見が異なる場合は、そのすり合わせの必要性が生じていた。

【家族からの影響・家族への影響】では、全てのケースで〈家族が理解・協力してくれている〉と感じていた。また、〈子どもたちと本番で共演〉という形で、子どもと親がそれぞれの役割がありながら、ともに楽しむ様子も見受けられた。〈子育てが活動に活きていると感じる〉〈活動が子育てに活きていると感じる〉に該当しているケースが多いので、活動と子育てが相互に影響しあっていると考えられる。子どもからの影響として、「ママってやっぱり、子どもが成長している過程にいるからさ、子どもが新しいことに常に挑戦したりするから、わたしも、じゃあ新しいこと始めてみようかなって気になるんだな」という言葉で語られた。これらの語りから、日々成長し変化する子どもの存在自体が、親自身の変化（の欲求）を促していることがうかがえる。〈活動させてくれてありがとうと思う〉〈家族の負担〉では、我が子に対して「ありがとう」という思いや「申し訳ない」という葛藤が語られていた。

最後に、リーダーにとっての【活動の位置づけ・意義】について見ていく。ここでは本調査

の全てのケースで〈貢献心〉が語られた。これは「自分自身が活動を通してリフレッシュできたように、今度はその機会を提供したい」思いや、「演奏を聞いてくれた人が少しでも喜んでくれるのが嬉しい」というような、他者へのエンパワーを表している。自身が活動によってエンパワーされた力を次に他者に向けることで、エンパワメントの循環が起きていると考えられる。

そして活動は〈生活の一部〉となり、〈この仲間と一緒にいたい〉というサークル内の良好な人間関係が活動継続の動機を強めていた。また、活動を〈日常であり非日常〉と位置づけている場合もあった。これは活動が生活の一部ではあるが、あってもなくてもいいようなものではなく、「楽しみ」や「ワクワク」を感じるもの、「日常でもあり、非日常でもある」という言葉で表現された。こうして彼女たちは、親として子どもの成長に日々立ち会う生活の中で、自身も仲間とともに活動を楽しみながら〈自分の成長〉を実感しているのである。

Ⅳ．おわりに

本研究では子育て中の生涯学習について、文化活動サークルのリーダーを務める母親を対象にインタビュー調査を行い、活動の実際とリーダーの意識を明らかにした。その結果、7つのカテゴリーと40の下位カテゴリーが抽出・分類された。対象者は、出産前の経験を活かし、活動仲間との関係を築きながら、自身の学びとなる活動を継続していることが明らかになった。子ども連れでの活動は、さまざまな工夫と配慮を伴いながら、メンバーや子どもの成長とともに変化し、家族とも相互に影響しあっていることが示された。日々成長し変化する子どもの存在が親自身の変化（の欲求）を促していたケースから、親であること自体が活動の開始や継続を強化するという可能性も示唆された。リーダーは活動と生活とを調整しながら継続の工夫を行い、活動を自己の成長とともに仲間や観客への貢献としても位置づけている。

ここで行われていた文化活動は、音楽、ダンス、多言語の活動であり、資格取得や生計のために行われるものではなかった。つまり、1章2節でレビューしたところの「存在の領域」（＝“Learning to be”）としての学びである。本研究の場合、さらに親役割以外の「自分自身になる」学びでもあった。現代社会の「合理的・効率的であることが善」という風潮にあまりにも慣らされてきてしまったわたしたちには、「その学びは何の役に立つのか」という「所有の領域」の思考回路が先に立ってしまうかもしれない。しかしながらインタビューでの語りの中で「一点の光」と形容されたように、学ぶこと自体に喜びがあり、学ぶこと自体が回復なのである。親の「存在の領域」としての学びに意義を見出すことは、子育て中の親が自らを生きることを楽しみ、喜ぶのを肯定することでもある。

今後はリーダーではない参加メンバーの立場への調査を行い、子育て中の生涯学習の活動プロセスについてより深く検討したい。また、父親に焦点を当てた調査も行い、子育て中の親が子どもとともに人生を豊かにする営みについて探っていきたい。

謝辞

本研究のインタビューに快く応えてくださった協力者の方々に心より感謝申し上げます。みなさまの語りから多くの気づきを得ることができたと同時に、人生を主体的に生きる姿に筆者自身がエンパワーされたと感じています。誠にありがとうございました。

注

1. パリで開かれたユネスコの第3回成人教育推進国際委員会において、成人教育部長のポール・ラングラン（P.Lengrand）が『生涯教育について』と題したワーキングペーパーを提出したことによる。垂直的次元の教育機会の統合と水平的次元の教育機会の

統合を提唱した。

引用・参考文献

(1) NPO法人子育てひろば全国連絡協議会（2015）『地域子育て支援拠点事業に関するアンケート調査 地域子育て支援拠点における「つながり」に関する調査研究事業』

(2) ゼネラルリサーチ（2019）『「アウェイ育児」に関する意識調査』（general-research.co.jp）

(3) 株式会社　政策基礎研究所（2021）『子育て世代にかかる家庭への支援に関する調査研究　報告書』

(4) たとえば善積京子（1980）「現代家族と子育て」『大手前女子短期大学発行誌』（4）pp.43-47

(5) 藤本明美（2020）「子育てサークルは地域のソーシャル・キャピタルを豊かにするのか：子育てサークルOB対象の質問紙調査をもとに」『神戸教育短期大学研究紀要』（1）p.69

(6) 原田正文（2006）『子育ての変貌と次世代育成支援』pp.102-103

(7) 同上pp.104-105

(8) 藤本明美（2020）前掲pp.69-85

(9) 同上

(10) 田中雅文（2020）「生涯学習とは何か」『テキスト生涯学習―学びがつむぐ新しい社会―［新訂2版］』学文社pp.17-20

(11) 同上

(12) 柴田彩千子（2021）「子育て中の母親の抱える葛藤に関する一考察―母親を対象とした学習デザインに向けてー」『東京学芸大学紀要　総合教育科学系』（72）pp.351

(13) 柴田彩千子（2020）「子育て中の女性が「主体性」を獲得していくプロセスの分析―公民館講座から広がる地域づくりの研究―」『日本学習社会学会年報』（16）pp.91-99

(14) 中村（足利）志保（2023）「子育て期における母親の学び合いの効果　実践コミュニティとソーシャル・キャピタルの視点から」『生涯学習と地域づくりのハーモニー―社会教育の可能性』pp.94-104

(15) 山澤和子（2023）「保育つき講座の修了生における意識変容の学習　気づきに着目して」『生涯学習と地域づくりのハーモニー―社会教育の可能性』pp.105-115

(16) 山本双葉（2011）「音楽の生涯学習における活動プロセスの分析―修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）による質的研究―」東京学芸大学大学院2011年度修士論文